

ピアノ実技に関する実態分析と指導の方向性

市橋佳明¹⁾・安田万里子¹⁾

An Analysis of the Situation in Practical Piano Skills And Instruction for the Right Direction

Yoshiaki ICHIHASHI and Mariko YASUDA

幼稚園や保育所において、「ピアノ実技の力」は必要不可欠である。このことについては、多くの学生が「教師や保育士にとって、ピアノ実技の力は必要である。」ことを認識している。にもかかわらず、実態としてピアノ実技が非常に難しいと感じている学生も多い。今回の実践研究では、ピアノ実技の力を高めるために、「読譜力」を高める指導に焦点化し、この読譜力を高めることによって、学生が自主的にピアノ練習に取り組み、ピアノ実技の力を高める指導へとつなげたいと考え実践研究した。換言すれば、学生一人一人が、自主的にピアノ実技を高めるためには、読譜力を高めることが必要不可欠であるということである。本学に入学して初めてピアノを弾く学生も非常に多く、ピアノ実技の力を高める指導においては、学生の実態を把握・分析して、読譜力を高める指導と、ピアノ実技の力を高める指導について、明確な観点と系統的、段階的な指導の在り方を明らかにして実践した。さらに、それぞれの力を高めていく上で、指導が点で終わることがないように点と点を線のようにつなげ、音楽A・音楽B、あるいは音楽表現技術A・音楽表現技術Bと、他の授業との関連も考えて実践研究し、「ピアノ実技の力」を高めるためには、「読譜力」が大きな要素の1つであることを明らかにした。

キーワード：実態把握・分析、読譜力、ピアノ実技の力、系統的・段階的指導

1 はじめに

幼稚園教育要領、保育所保育指針において、領域「表現」で、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と記述されている。そこからは、音楽で考えると、歌を歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音楽に親しんだり楽しんだりすることも大切であるが、様々な音楽活動を通して、子どもたちが素直に自己表現できるように指導していかなければならないことが読み取れる。

幼稚園や保育所では、子どもたちが、毎日みんなと一緒に歌を歌ったり、踊ったり、リズム楽器を弾いたりしながら、音楽を楽しんでいる。このような

姿は、子どもたちが、自己表現する手段として自然な姿であり、保育者は、音楽活動によって子どもたちの豊かな感性が養われ、磨かれるものと自覚して音楽指導に当たりたい。

子どもたち一人一人は、様々な姿で自己表現することが多い。保育者はその表現を受容し、子どもたち一人一人が、自己表現しようとしている意欲を大切にしたい指導をしていかなければならない。そのために、保育者は子どもたち一人一人の表現をよく見つけ、その様相にあった指導をしたり配慮をしたりして、子どもたちが自己表現活動を楽しむことができるように指導していきたい。

本学教育学部子ども教育学科の学生の実態を見ると、ピアノ実技およびピアノの弾き歌いの現実

1) 教育学部子ども教育学科

的な課題として、次のようなことがある。

楽譜を読むことができない。ピアノがすらすらと弾けない。楽譜を見ながらであればピアノがなんとか弾くことができるが、子どもたちが眼前にいることを想定して暗譜でピアノを弾くことは難しい。教室に響き渡るくらいの声で歌うことが難しい。歌を歌うことに抵抗感がある。ピアノだけ、歌だけであれば何とかできるが、ピアノと歌を合わせてピアノの弾き歌いをしようとするとうまく合わせることができない。ピアノを弾くことに集中してしまって、歌を歌おうとするとピアノもうまく弾けなくなる。など様々な課題がある。

学生の実態として、ピアノ演奏やピアノの弾き歌いについて、本学に入学するまで全くの初心者である学生が35.3%いるということもありやむをえない姿ではある。とは言うものの、保育者を目指す学生たちにとっては、ピアノ実技やピアノの弾き歌いができるということは必須のことであり、「ピアノ実技やピアノの弾き歌いがうまくできるようになりたい」という学生の意識も高い。

前述した課題については、読譜力、ピアノ実技、歌唱力、ピアノの弾き歌いなどについて、学生の課題のみが問題視されることが多いが、指導者側の指導方法の在り方についても考えていく必要があると思う。

そのため、保育者をめざす学生たちから実態調査の質問紙調査をとり、実態把握・分析・考察をして、ピアノ実技およびピアノの弾き歌いの力を高めるための効果的な指導方法を検証し、問題点や改善点・効果的な指導方法を考え実践研究した。

2 方 法

保育者をめざす学生に対して、ピアノ実技およびピアノの弾き歌いの効果的な指導方法を考える基盤として、下記のような実態調査をした。

(1) 実態調査のための対象者

- ・本学教育学部子ども教育学科1年生のうち「音楽A」受講者
- ・本学教育学部子ども教育学科2年生のうち「音楽表現技術A」受講者

(2) 調査期間

平成29年6月～7月に実施

(3) 調査方法

上記の1年生、2年生の学生一人一人に選択式の質問紙調査(自由記述あり、無記名)を配布し回収

(4) 調査内容

- ・大学入学時までのピアノの学習経験と学習時期
- ・ピアノ、キーボードの学習環境
- ・ピアノ・弾き歌いの1週間の練習回数
- ・ピアノ・弾き歌いの1回当たりの練習時間
- ・自主的な練習ができにくい理由
- ・ピアノ・弾き歌いに対する意識
- ・ピアノ・弾き歌いの向上のために必要なこと
- ・悩んだり困ったりしていること(自由記述)

3 結果と考察

質問紙調査の回答は、1年生「音楽A」受講者57名人中54人、2年生「音楽表現技術A」受講者53人中51人、合計110人中105人から得られた。

回収率は95.5%であった。

(1) 大学入学時までのピアノの学習経験

「大学入学時までに、ピアノの学習経験はありましたか。」「それはいつ頃ですか。」

表1-1 大学入学時までのピアノの学習経験

	1年	2年	計 人 (%)
5年以上	15人	18人	33人 (31.4)
3年以上5年未満	6人	8人	14人 (13.3)
3年未満	9人	12人	21人 (20.0)
全くなし	24人	13人	37人 (35.3)

表1-2 それはいつ頃(複数回答あり)

	1年	2年	計 人
幼稚園・保育園の頃	12人	19人	31人
小学校の頃	17人	24人	31人
中学校の頃	7人	13人	20人
高等学校の頃	12人	16人	28人

大学入学時までのピアノの学習経験について質問したところ、「全くなし」という回答が全体の35.3%で最も高かった。特に1年生は44.4%と高く、半数近い学生がピアノの学習経験なしで入学してきてい

ることが分かった。

「5年以上」と回答した学生が31.4%と「全くなし」に次いで高い割合であった。しかし、時期に関する回答から、「5年以上」と回答した学生の中で、高等学校まで経験していた学生は約3割であった。ピアノの経験年数は長い、大学入学前の3年間は経験していない学生が約7割いることが分かった。「小学校まで」となっている回答も複数あり、大学入学前の6年以上経験していない場合もあることが分かった。

また、逆に、「高等学校で経験をしている」と回答した学生は全体の26.7%であるが、そのうち、経験年数が「5年以上」と回答した学生は約3割であるのに対し、「3年未満」と回答した学生は約5割と高かった。大学入学前の時期まで経験しているが、経験年数としては短い学生が多いことも分かった。

以上のことから、経験年数は長い大学入学まで継続していた学生は少なく、大学入学前まで学習していても経験年数は少ない学生が多い実態も明らかになった。

(2) ピアノ、キーボードの学習環境

「ピアノ、キーボードなどの学習環境について、回答してください。」

表2 ピアノ、キーボードの学習環境

	1年	2年	計 人(%)
自宅にピアノがある	21人	31人	52人(49.6)
自宅にキーボードがある	20人	15人	35人(33.3)
自宅にはない	13人	5人	18人(17.1)

「自宅にピアノがある」と回答した学生が半数近い49.5%と最も高く、自宅にキーボードがあると回答した学生33.3%と合わせると82.8%となった。自宅でもピアノ実技の学習ができる環境にある学生の割合が多いことが分かった。

また、質問(1)において、大学入学時までにピアノの学習経験が「全くなし」と回答した学生の中にも「自宅にピアノまたはキーボードがある」と回答した学生の割合が高いことも分かった。「ピアノがある」と回答した学生が37.8%、「キーボードがある」と回答した学生が35.1%、合わせて72.9%であった。

(3) ピアノ、弾き歌いの1週間の練習回数

「ピアノ、弾き歌いの練習は、1週間に何回しますか」 ※1回の練習時間は15分以上

表3 ピアノ、弾き歌いの1週間の練習回数

	1年	2年	計 人(%)
週4回以上	7人	2人	9人(8.6)
週2回以上4回未満	25人	18人	43人(41.0)
週1回	18人	19人	37人(35.2)
授業のみ	4人	12人	16人(15.2)

ピアノや弾き歌いの1週間の練習回数に関して「授業のみ」と回答した学生は15.2%となっていた。

「授業のみ」と回答した学生と、「週1回」と回答した学生35.2%を合わせると、50.4%となり、練習に対して積極的に取り組んでいるとはいえない学生、練習の積み重ねができていない学生が約半数いる状況である。

「週4回以上」と回答した学生は、8.6%と1割以下であった。「週2回以上4回未満」と回答した学生41.0%と合わせると、49.6%となる。

以上のことから、練習に対して積極的に取り組んでいるといえる学生と、積極的に取り組んでいるとはいえない学生が約半数ずつになることが分かった。

大学においては、授業開始前、授業終了後、授業時間内であっても、授業で使用していない時はピアノレッスン室を使用することができ、また、質問2において、「自宅にピアノまたはキーボードがある」と回答した学生が82.8%いたことを思うと、練習に積極的に取り組む学生の割合が、もっと高くなることを望みたい。

自宅にピアノ・キーボードがある学生で、本質問に対して、「練習は授業のみ」と回答した学生が17.2%いたことから、練習に積極的に取り組めない要因は学習環境面以外のことも大きく関係していると推察される。この点に関しては、質問(5)において述べたい。

また、学年別に見ると、「週4回以上」と回答した学生が1年生は13.0%に対して、2年生は3.9%と低かったこと、逆に、「授業のみ」と回答した1年生が7.4%に対して、2年生は23.5%と高かったことも分かった。

学年があがることで、練習への意識・意欲が変化

していることも考えられる。技術の習得には積み重ねが大切になるため、意識・意欲が継続していくための取り組みも考えていかななくてはならないと思う。

- (4) ピアノ、弾き歌いの1回当たりの練習時間
「ピアノ、弾き歌いの練習は、1回当たり平均して何分くらいしますか。」

表4 ピアノ、弾き歌いの1回当たりの練習時間

	1年	2年	計 人(%)
1時間以上	9人	2人	11人(10.5)
30分以上1時間未満	22人	19人	41人(39.0)
15分以上30分未満	17人	21人	38人(36.2)
15分未満	5人	9人	14人(13.3)
無回答	1人		1人(1.0)

1回当たりの練習時間は「1時間以上」と回答した学生は10.5%おり、「30分以上1時間未満」と回答した学生と合わせると49.5%となった。約半数の学生が1回の練習に30分以上時間を取っていることが分かった。

しかし、質問(3)と照らし合わせると、「1時間以上」「30分以上1時間未満」と回答した学生のうち28.8%は1週間の練習回数が1回となっていた。授業の前日に慌ててピアノに向かうという学生の姿も想像される。

一方で、1回の練習回数は「15分未満」であっても1週間の練習回数が「2回以上4回未満」と回答している学生もあった。

1回当たりの練習時間は長い練習の継続性・積み重ねが乏しい場合や、1回当たりの練習時間は短い練習の継続性があり積み重ねもできている場合がある。1週間の練習回数と1回当たりの練習時間との関わりについては、練習効果を知る上でも今後の調査課題としていきたい。

- (5) ピアノ、弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由
「ピアノ、弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由は何ですか。」

※あまり練習しない人のみ回答
※複数回答可

表5 ピアノ、弾き歌いの自主的な練習ができにくい理由

	1年	2年	計 人
身近にピアノがない	10人	5人	15人
楽譜が読めない	4人	7人	11人
ピアノを弾くのが嫌いだ	1人	7人	8人
アルバイトに忙しい	8人	25人	33人
その他	10人	17人	27人
無回答	25人	9人	34人

あまり練習しない人のみに回答を求めた結果、回答者は1年生29人、2年生42人、合計71人となった。

練習ができにくい理由として、「自宅にピアノがない」と回答した学生は15人であった。自宅における学習環境が与える影響があることは否定できないが、前述したように、大学においてもピアノに触れられる環境はあるため、その環境も最大限活かすよう、声をかけ続けていきたい。

練習できない理由として最も多かった回答が、「アルバイトに忙しい」であった。「その他」と回答した27人のうち15人が、「部活等、〇〇が忙しい」と記述しており、「アルバイトに忙しい」と合わせて忙しさを理由として回答した学生は67.6%と7割近かった。それぞれの学生の状況もあり、学生の日々の生活そのものは、音楽の授業内だけでは計りきれない部分があると痛感する。

また、アルバイト・部活等で帰宅が遅くなり、迷惑になる時間帯であるため練習できない、という回答も複数あった。このことは、質問(3)における、「自宅にピアノがあっても練習するのは授業のみ」と回答した学生が17.2%いたことにつながっていると思われる。

このことに関しても、授業の空き時間にピアノレッスン室を使用することでクリアーできる部分もあるため、併せて声をかけ続けていきたい。

「楽譜が読めない」と回答した学生も11人おり、音楽の要素が理由となっていることは見過ごすことができない。音楽のその他の授業と連携を取る等、問題解決に向けて積極的な取り組みをする必要があると感じる。

- (6) ピアノや弾き歌いに対する意識
「ピアノや弾き歌いに対して、どのように思っていますか。」
※複数回答可

表6 ピアノやピアノの弾き歌いに対する意識

	1年	2年	計人
保育者にとってピアノや弾き歌いの技術は必要である	37人	38人	75人
ピアノや弾き歌いが得意である	2人	6人	8人
練習すれば弾けるようになるので楽しい	34人	17人	51人
できるようになるまでに時間がかかりすぎて嫌だ	8人	11人	19人
楽譜が読めずピアノが苦手である	11人	10人	21人
歌を歌うことが苦手である	13人	10人	23人
ピアノと歌を合わせ弾き歌いしようとするのが難しい	10人	20人	30人
保育者にとってピアノや弾き歌いができなくても問題ない	1人	4人	5人

「保育者にとってピアノや弾き歌いの技術は必要である」と回答した学生は75人おり、1・2年生とも、最も回答数の多い項目であった。これまでの質問に対する回答がどのようであっても、必要性を感じている学生が多いことが分かった。

次いで「練習すればできるようになるので楽しい」と回答した学生が51人と多かった。ただし、学年別で見ると、1年生34人、2年生17人となっており、人数の差が最も出る項目となった。前述したように1年生は大学入学までピアノの学習経験が全くなかった学生の割合が高く、経験していなかったことができるようになる喜びを感じている学生が2年生よりも多くなっていることも考えられる。また、質問(3)(4)の結果から、2年生においては、練習回数・練習時間により、喜びを感じられる、そこまで至っていない学生が多いことも推察される。

「楽譜が読めずピアノが苦手である」「歌を歌うことが苦手である」「ピアノと歌をうまく合わせられない」と回答した学生も、1・2年生ともに10人以上おり、授業において解決に向けた取り組みをしていくことが必要であると感じる。

また、「保育者にとってピアノや弾き歌いはできなくても問題ない」と回答した学生も5人おり、1年生で1人、2年生で4人となっている。2年生は、既に教育実習も経験しており、中には子どもたちの前でピアノを弾く経験をした学生もいるが、自分自身の経験も踏まえてそのように回答しているのか、

どのような理由でそのように回答したのか掘り下げたい部分である。本調査においてはこれ以上の追及はできないが、今後、そのように思う理由を明らかにしていきたい。

- (7) ピアノや弾き歌いがうまくなるための手だて
「ピアノや弾き歌いがうまくなるためには、どうしたらよいと思いますか。」 ※複数回答可

表7 ピアノや弾き歌いがうまくなるための手だて

	1年	2年	計人
ピアノの練習回数・練習時間を長くする	45人	37人	82人
歌の練習回数・練習時間を長くする	16人	19人	35人
段階的に練習する必要がある	38人	33人	71人
身近にピアノやキーボードが必要である	12人	7人	19人
大学の授業以外に個人レッスンを受ける	2人	4人	6人
その他	4人	0人	4人

「練習回数・練習時間を長くする」と回答した学生が、82人と最も多く、学年別で見ても、それぞれ最も多い回答数となった。技術を習得するためには、実態は伴わなくとも、日々の練習の積み重ねが必要であることを感じている学生が多いことが分かった。

「段階的に練習する必要がある」と回答した学生も多く、1年生38人、2年生33人であった。まずは右手の練習、次に左手の練習、それらが充分にできてから両手の練習、という段階を踏んでいくことが、曲を仕上げる上では有効な練習の進め方となる。一見、時間がかかるようでも、曲の仕上がりが結果的に早くなることも望める。必要性は分かっているが、この取り組みがなかなか実行出来ない学生の実態も感じる。自主的な練習につながるよう、この練習の進め方に関しても徹底して指導を重ねていきたい。

また、質問(2)(3)において、自宅にピアノ・キーボードがあっても「練習は授業のみ」という学生が17.2%いたことが明らかになっているが、本質問においては、「自宅にピアノ・キーボードが必要」

と回答した学生が19人いた。授業時以外、自宅での練習も必要であることを感じている学生がいることも分かった。実際に購入を考えている学生がいた際には、それぞれの状況に合わせてどのようなものを選べば良いか等、教員が相談に乗ることも必要になってくるかもしれない。学生の学習環境の充実につながるよう教員側の意識も高めていきたい。

(8)「ピアノ」に関して、悩んだり困ったりしていることがあったら、自由に記述してください。

自由記述にて回答を求めたところ、1年生16人、2年生15人、合計31人から回答を得た。

「指がうまく動かない」という回答が複数あり、全て1年生の回答であった。大学に入学して初めてピアノを弾いた学生にとって、1本1本の指をバラバラに動かすことは大変な作業であると思われる。日々の積み重ねにより、指がよく動くようになる実感を得ることを望むとともに、指を動かす基礎的なトレーニングを授業内容に取り組むことも検討の余地があると感じる。

2年生においては、「両手で弾くことが難しい」という回答が複数あった。大学入学当時、ピアノの学習経験がなかった学生も、1年間の学習の中で1本1本の指は動くようになっていくと推察される。片手ずつでは弾くことができて、両手で合わせた時にうまくいなくなる学生の姿が見えてくる。具体的な取り組みの方法を示していく必要があると思われる。

2年生のみに見られた回答として、「大切であることはわかっているがやる気が出ない」「練習の意味が分からなくなった」があった。学年があがることで、質問(3)で見られた意識の変化が、本質問においても見られる結果となった。

1・2年生ともに、「楽譜が読めない」と記述している学生も数名いた。楽譜が読めないことが、自主練習の妨げの要因の1つになっていることは質問(5)において明らかとなったが、加えてピアノを学習する上での悩みにもなっていることが分かる。楽譜が読めること、読譜力を高めることは、自主学習を支える上でも、学習を深める上でも欠かせない要素となることが伺える。

4 「ピアノ実技」指導の具体的実践

本学に入学するまでに、一度もピアノやキーボードに触れたり演奏したりしたことがない学生にとって、ピアノを演奏するという事は非常に難しいことである。しかし、保育者をめざす学生には、ピアノ実技の力は必須である。そのため、ピアノを演奏することが初めての学生でも、できる限り容易に、しかも主体的に楽しく学習していくことができるように、次の3点から、「ピアノ実技」の力を高めていくことができるための実践研究を深めた。

- ・本学の「ピアノ実技」の授業について
- ・「読譜力」を高める指導について
- ・「ピアノ実技の力」を高める指導について

(1) 本学の「ピアノ実技」の授業について

① 「ピアノ実技」の授業と音楽環境

本学では、「ピアノ実技」の授業を、音楽A(1年前期)、音楽B(1年後期)として実施している。ピアノ弾き歌いの授業としては、2年の学生も音楽表現技術A(2年前期)・音楽表現技術B(2年後期)として履修している。

ピアノ実技の授業は、1グループ6~7人を1グループとして、5グループに分かれ、それぞれ担当教師が1週間に1回90分の授業をしている。レッスン室は7教室あり、各レッスン室にはそれぞれアップライトピアノ1台とキーボード7台がある。学生一人一人がキーボードで練習しつつ、順番にアップライトピアノで担当教員がピアノ実技の指導をしている。1時間の授業が90分なので、学生一人当たりの指導時間は15分程度である。

グループについては、ピアノ実技初心者と経験者を分けて編成し、同じグループの学生がだいたい同じ進捗で履修できるように配慮している。

② 「ピアノ実技」に関するカリキュラム

本学では、「ピアノ実技」に関する授業内容は、1年・2年が履修学年となる。カリキュラムの内容は、音楽A(1年前期)・音楽B(1年後期)がバイエル教則本を中心とし、学生の実態に応じてブルグミュラー、ソナチネ、ソナタアルバムを履修している。

ピアノ弾き歌いの授業は、音楽B(1年後期)か

ら履修する学生もいるが、基本的には2年からで、音楽表現技術A（2年前期）・音楽表現技術B（2年後期）として実施し、教材として「幼児の歌110曲集」と、教員の選択した教材を履修している。

カリキュラムの年間授業実施回数は、音楽A（1年前期）、音楽B（1年後期）、音楽表現技術A（2年前期）、音楽表現技術B（2年後期）それぞれ16回である。

1年の学生は、約半数がピアノ実技の初心者であるため、バイエル教則本を中心に履修している。「音楽A」（1年前期）の授業では、教員が作成したステップ表に基づいて、「バイエル72番」までの決められた楽曲を、段階的に履修する。「音楽B」（1年後期）の授業では、ステップ表に基づいて、「バイエル104番」までの楽曲を履修している。この「音楽B」では、80番代、90番代、100番代について、学生が楽曲を選択して履修できるように配慮している。本学入学時までにはピアノ実技を経験している学生については、前述した内容を履修している。

また、2年の学生は、1年間で20曲以上の「ピアノの弾き歌い」のレパートリーができることを、目標としている。教員は、前述した曲集などからいくつかの教材を選択し、その難易度や保育教育現場の状況などに合わせて、「導入の教材」「ステップ1の教材」「ステップ2の教材」「ステップ3の教材」「ステップ4の教材」を表に示し、学生が具体的な目標を持って履修していくことができるように配慮している。

③「ピアノ実技」に関する評価

音楽A（1年前期）・音楽B（1年後期）、音楽表現技術A（2年前期）・音楽表現技術（2年後期）いずれも、評価は、日頃の授業態度とピアノの実技試験および弾き歌いの実技試験によって行っている。

音楽A・音楽Bのピアノの実技試験は、バイエルを履修している学生は、2曲自己申告した曲の中から、当日1曲をピアノ演奏し、担当している5名の教員が100点満点（5点刻み）で評価している。

また、2年の弾き歌いの実技試験は、音楽表現技術A（2年前期）においては、学生が3曲自己申告した曲の中から当日1曲を弾き歌いし、音楽表現技術B（2年後期）においては、学生が5曲自己申告した曲の中から当日2曲を弾き歌いして、担当して

いる4名の教員が、それぞれ100点満点（5点刻み）で評価している。

また、採点用紙には点数だけではなく、学生のピアノ実技、およびピアノの弾き歌いに関する所見も書き込んでいる。評価の視点は、1年はピアノ実技の力、2年はそれに加えて、歌唱力、弾き歌いの様子、目の前に子どもたちがいるような状況をイメージして弾き歌いできているかどうかなどで評価している。

（2）「読譜力」を高める指導

ピアノ実技の学生の実態を分析したとき、楽譜を読む力、すなわち読譜力が不足しているために、1週間ピアノの練習をまったくしないで過ごしてしまうという学生も少なくない。学生が少しでも読譜力を身に付けていれば、自ら主体的にピアノ実技の練習に取り組むようになるのではないかと考え、他の授業で指導している「楽典」の内容と連携を取りながら、「読譜力」を高める実践研究をしている。

① 曲との出会いとイメージ

始めて曲に出会ったときのイメージを、学生には心から大事にしてほしいと思う。曲と出会ったとき、学生のほとんどが、楽譜を見て右手だけでメロディーを弾くことから始める。このとき、楽譜から読み取ることができる音楽的な情報を、丁寧に読み取ってピアノを弾き始める学生と、そうではなくて楽譜に書かれているいくつかの音楽情報を、ほとんど読み取ることをしないで弾き始める学生がいる。

当然、後者の場合は、曲のイメージをほとんど掴めなかったり、間違えてメロディーを弾いたりしてしまうことが多くなる。したがって、新しい曲と出会ったときには、まず楽譜を丁寧に読み取るということが大切になってくる。楽譜を読み取る力を高めることによって、ピアノ実技の力を高めることにつながってほしいと願って指導している。この丁寧に楽譜を読み取る学習こそが、将来保育者になったときに生きて働く力になると思う。

② 音楽情報を楽譜から読み取る

楽譜には様々な音楽情報が書き込まれている。そこには、様々な音楽的な意図が書き込まれており、

学生はそこに書かれているいくつかの音楽情報を、まずは忠実に読み取って、ピアノ実技として表現することが大切になってくる。

それでは、楽譜にはどのような音楽情報が書き込まれているのであろうか。楽譜から読み取ることができるいくつかの音楽情報を下記に示してみる。

(ア) 楽譜と鍵盤

楽譜は、5線譜に記され、おおまかに高音部譜表(ト音記号)、低音部譜表(ヘ音記号)の部分から成り立っている。おおむねト音記号の部分は右手でピアノを弾き、ヘ音記号の部分は左手でピアノを弾くことになる。このとき、ト音記号の下第1線およびヘ音記号の上第1線が、ピアノの「中央のド」(一点ハ音)になることを丁寧に指導しなければならない。

また、5線譜、ト音記号、ヘ音記号、音階、縦線、終止線、階名、音名なども、学生自らが5線譜に記入することによって、楽譜に慣れ親しむように指導したい。

学生の実態を見てみると、特にヘ音記号の楽譜を読み取ることが今までにあまり経験がなく大変難しいようである。ヘ音記号の楽譜において、上第1線、第2間がドになるということが、楽譜を見てすぐに理解しピアノ実技に生かすことができるよう指導したい。

おもしろいことに、吹奏楽経験者の中に、演奏している楽器によっては、ヘ音記号の楽譜は読むことができるが、ト音記号の楽譜は読むことができないという学生も若干名いる。いずれにしても、日頃から楽譜に慣れ、楽譜とピアノの鍵盤が「対」として認識され楽譜を見たらすぐに理解して、ピアノ実技に生かすことができるよう指導していきたい。

(イ) 鍵盤と音の幅

ピアノの鍵盤を見ると、白い鍵盤(白鍵)と黒い鍵盤(黒鍵)があることが分かる。ピアノ初心者の学生は、ここで非常に戸惑ってしまうことが多い。

ハ長調の「ドレミファソラシド」をピアノで弾くとき、すべて白鍵を使う。そして、この「ドレミファソラシド」の音の幅は、ドとレの音の幅が「全音」、レとミの音の幅が「全音」、ミとファの音の幅は「半音」、ファとソの音の幅が「全音」、ソとラの音の幅が「全音」、ラとシの音の幅が「全音」、シとドの音の幅は「半音」になっている。すなわち、ミとファ、

シとドの間にだけ黒鍵がなく「半音」という音の幅になっているのである。つまり、鍵盤のとなりどうしの音を「半音」といい、半音の2つ分を「全音」というのである。このことを、楽譜と鍵盤を照らし合わせながら繰り返し指導した。このとき気を付けたのは、音楽大学あるいは音楽学科の学生ではないため、学生の困惑を避けるためにハ長調のみ指導したことである。

(ウ) 調号と変化記号

ト音記号やヘ音記号のあとに、シャープ(♯)やフラット(b)の調号が付いている楽譜がある。シャープやフラットの数によって、ハ長調、ト長調、ヘ長調・・・などと呼び、シャープが1つのときは「ファ」につき、シャープが2つのときは「ファ」と「ド」につく。またフラットが1つのときは「シ」につき、フラットが2つのときは「シ」と「ミ」につくと決められている。

そして、シャープが付いている音は半音上げ、フラットが付いている音は半音下げてピアノを弾かなければならない。この調号についても確実に読み取って、ピアノ実技に生かしていく必要がある。

また、このシャープやフラットは、楽譜の途中に使われている変化記号の場合がある。この場合は、使われている小節のみ有効であることを指導し、実際のバイエルの楽譜でも学習したことを生かすことができるようにしている。さらに、シャープやフラットを付けて変化させた音を元に戻すには、ナチュラル(♮)という記号を使うことも指導している。

本学の学生の実態としては、この調号や変化記号についてほとんどの学生が理解し、ピアノ実技に生かすことができていると考えている。

(エ) 音符と休符、リズム

ピアノを演奏するときは、基本的には5線譜に書かれた音符や休符を読み取って弾く。したがって、基本的な音符や休符を確実に理解し、具体的な音の長さとして体感しなければならない。

音符も休符も様々あるが、押さえておきたい基本的な音符として、全音符、2分音符、付点4分音符、4分音符、8分音符、16分音符がある。休符は、全休符、2分休符、4分休符、8分休符、16分休符などがあり、これらの音符と休符については、音や身体を使って、学生に是非理解させておきたい。

また、これらの音符や休符の組み合わせによって、いくつかのリズムも構成されるため、身体で拍を感じながらリズム感を養っていくことも非常に大切なことであり日々実践している。

(オ) 拍子

調号のあとに楽譜に書かれているものが、「拍子」である。たとえば「4分の4」という拍子は、「1小節の中に4分音符が4つ分ある」ということを理解して、「1・2・3・4」という拍を感じながらピアノ実技をする必要がある。学生に指導している基本的な拍子は次の通りである。

○4分音符を1拍と数える場合

- ・4分の2拍子：1小節の中に4分音符が2つ分
- ・4分の3拍子：1小節の中に4分音符が3つ分
- ・4分の4拍子：1小節の中に4分音符が4つ分

○8分音符を1拍と数える場合

- ・8分の3拍子：1小節の中に8分音符が3つ分
- ・8分の6拍子：1小節の中に8分音符が6つ分

拍子は、その曲そのもののイメージや雰囲気が大きく影響を与えるものであり、拍の強弱を音や身体全体を使って理解させ、音楽的な表現へと結びつけることができるよう指導している。具体的には、4分の2拍子では「ラデツキー行進曲」を聴かせ、身体で拍をとったり指揮をしたりして、拍子をより分かりやすく体感できるように指導している。

(カ) 長音階と短音階

音階には、長音階と短音階がある。長音階は、前述したように、「ドレミファソラシド」の音の幅が「全音・全音・半音・全音・全音・全音・半音」の順番に並んでおり、短音階は、「全音・半音・全音」というように初めの4音が並んでいる。このように長音階の音で構成されているのが長調であり、短音階の音で構成されているものが短調である。また、長調の主音は「ド」であり、短調の主音は「ラ」であることも指導した。

このことを、楽譜と実際のピアノの音で理解させ、長音階と短音階の体感をさせていった。また、短音階には自然短音階、和声短音階、旋律短音階があるが、第5番目以降の音については、音の幅が違うため、教師がピアノを弾いて、具体的な音を学生に聴かせ、感覚的に把握させた。

(キ) 強弱記号

楽譜には、作曲者が意図した強弱記号が記されている。たとえば、フォルティッシモ（とても強く）、フォルテ（強く）、メゾフォルテ（少し強く）、メゾピアノ（少し弱く）、ピアノ（弱く）、ピアノッシモ（とても弱く）やクレシェンド（だんだん強く）、デクレシェンド（だんだん弱く）などの記号がある。

実際バイエル教則本やブルグミュラー、ソナチネ、ソナタなどにも、この強弱記号が記されており、ただ何となく演奏するというだけでなく、強弱記号を自分なりに解釈して、音楽的に表現させたい。

(ク) 速度記号

速度記号には、たとえば「♩=120」のように、1分間に4分音符を120回打つ速さで、ということを示したり、アダージョ（遅く）、アンダンテ（ゆっくり歩くような速さで）、アレグロ（速く）のように速さを言葉で示したりするものがある。実施の授業では、混乱を避けるため「♩=120」の記号の意味と、メトロノームを使った速度の体感などを重点的に指導した。

(ケ) 奏法や曲想に関する記号

楽譜には前述した様々な音楽情報のほかに、奏法、曲想、演奏の順序を示すものなども記されている。たとえば、スタッカート（その音を短く着る）、アクセント（その音を特に強く）、フェルマータ（その音符や休符をほどよく伸ばす）というような奏法に関する記号や、カンタービレ（歌うように）、ドルチェ（あまくやわらかに）、レガート（なめらかに）、マエストーソ（荘厳に）など曲想に関するものがある。さらには、反復記号や、ダカーポとフィーネ、ダルセーニョ→セーニョ→フィーネ、コーダマーク→コーダのように演奏の順序に関する記号についても指導した。

これらの記号は、音楽表現をしていく上ですべて必要であるが、あまり多くを学生に提示すると混乱を招き、音楽嫌いを作ってしまう恐れがあるため、厳選して具体的な音楽を通して指導した。

ピアノ実技をするときには、学生は楽譜に示されているこれらのたくさんの音楽情報を、読み取って演奏することが大切である。そこで、学生の読譜力を高めながらピアノ実技ができるようにするため

に、ピアノ実技の授業と他の授業が「点」で終わることがなく、「線」で結んで指導できるように、様々な音楽情報について、学生一人一人の実態に応じて指導している。

(3) 「ピアノ実技の力」を高める指導

保育者にとって「ピアノ実技の力」をつけたり高めたりすることは、非常に重要である。本学の学生の実態を見てみると、約半数が大学に入学して初めてピアノを弾くというピアノ初心者である。初心者にとってピアノを弾くということは、様々な観点から非常に困難なことである。その学生たちに、まずはピアノを弾く基本的な心構えと動作を指導する必要がある。

① ピアノを弾くための心構え

大学入学時の学生の実態は、「保育者を目指すということは、ピアノ実技の力を付けなければならない」ということは十分に分かっている。しかし、実際にピアノを弾き始めると、「できるわけがない。」とか「絶対に無理。」という心情が湧いてくる。まずはこの気持ちを払拭させることが大事であると思う。そのため、初心者のグループでは、初めは個別指導ではなく全員一緒に丁寧に段階的にゆっくりと時間をかけて、一人一人に確認を取りながら指導を進めている。学生の中には、「自分だけがピアノを弾けないのではないか」と思っている学生も多いため、ピアノ初心者が非常に多いという実態や、みんなピアノに対する不安な気持ちがあることを話し、少しでも安心してピアノ実技に取り組むことができるように指導している。

② ピアノを弾くための姿勢

ピアノを半年ほど経験してきた学生でも、中央のド（一点ハ音）の位置を1オクターブ間違えて演奏する学生もいる。したがって、ピアノを弾くために、まず中央のド（一点ハ音）の位置に、自分の身体を中心において座らせることが大切である。また、ピアノが演奏しやすいように、自分の身体に合わせて椅子の高さを調節させることが大切である。さらに、右手と左手を自由に動かしやすいように、椅子にはあまり深く腰掛けず浅く腰掛けさせることも指導したい。そして、背筋を伸ばして正しい姿勢で演奏させたい。このとき椅子に深く腰掛けたり、前か

がみになってピアノ演奏しがちなので留意して指導に当たっている。

③ ピアノの鍵盤と楽譜

ピアノ演奏する場合には、楽譜を見たり読み取ったりしたことが、瞬時にピアノの鍵盤を弾くということに反映されなければならない。ピアノの鍵盤は88鍵あるが、まず、楽譜のト音記号の下第1線、およびヘ音記号の上第1線が、ピアノの「中央のド」（一点ハ音）になっていることを丁寧に指導したい。

また、ピアノの鍵盤は、白鍵7、黒鍵5の計12鍵が1つのまとまりになっている。このことを学生に理解させるとともに、常にピアノの「中央のド」（一点ハ音）を意識させてピアノ演奏させたい。前述したように、1オクターブ間違えて演奏し始める学生がいるが、「中央のド」（一点ハ音）の位置を十分に確認しないで、ピアノの椅子に座ったとたんに弾き始める学生に多い。椅子に座ったら落ち着いて「中央のド」（一点ハ音）の位置を確認し、正しい姿勢でピアノ演奏させたい。

④ 読譜とピアノ演奏

楽譜を見たり楽譜を読み取りながらピアノを弾くということは非常に難しいことである。特に、ピアノ初心者にとってはなおさらである。まず何が難しいかというと、楽譜を見て瞬時に階名（ドレミ）が分からないということである。階名（ドレミ）を読み取ることができなければ、ピアノ演奏はできないといっても過言ではない。そうしたことから、楽譜にカタカナで階名（ドレミ）を書き込んでいる学生もいる。本来なら階名を楽譜に書き込むことをしないで、楽譜を見ながらピアノ演奏できることがよいと思われるが、筆者は学生一人一人の実態に応じて認めたり、段階的に階名を書き込むことをやめさせたりして指導している。中には、階名を友だちに書いてもらっている学生もいたので、少なくとも自分の力で楽譜を読み取り、階名を自分で書き込むように指導した。その結果、初めは演奏しにくい部分や、演奏することに不安な部分について、階名を書き込んでいた学生たちも、次第に階名を書き込まなくても演奏できるようになっていった。

⑤ 手の形と運指

ピアノを弾くとき、初心者の学生に多い手の形が、

指を真っ直ぐに伸ばしたまま、非常に力を入れているという姿である。そのような学生は、15分から20分ぐらいで手首が痛くなりピアノ実技ができなくなってしまう。指を真っ直ぐにしてピアノを弾くと、ピアノ本来のよい音が出にくいばかりか、隣の音も一緒に弾いてしまい、美しい音色の演奏になりにくい。手首や指の力を抜いてピアノ演奏させようと指導はしているが、脱力することに時間がかかる学生もいる。

ピアノを弾くときの指の形は、関節を曲げて丸みを持たせ、1本1本の指が自由に動かしやすいように、力をガチガチに入れないで演奏させたい。

また、右手も左手も「指番号」が決められている。演奏がしやすいように、楽譜には指番号が示されていることが多いので、その指番号の指示に従って演奏できるよう指導したい。時折、楽譜に指番号が示されているにも関わらず、その指番号に従わずにピアノ演奏するために、大変弾きにくい演奏になったり、音をはずして演奏したりする姿も見られるので、留意して指導に当たっている。

⑥ 音楽情報をピアノ演奏に生かす

ピアノの楽譜には、前述したような様々な音楽情報が書き込んである。ト音記号・ヘ音記号、調号・変化記号、拍子、速度記号、音符と休符、リズム、強弱記号、奏法や曲想に関する記号などである。これらの音楽情報を十分に読み取りピアノ演奏してほしいと願い指導している。その音楽情報は、作曲者がこのように音楽表現してほしいという願いであり、メッセージであると思う。ただ、様々な音楽情報を読み取り、その通りに演奏すればよいというわけではない。

ピアノ演奏は、楽譜に書かれていることを忠実に弾くことも大事であると思うが、もっと大事なことは、保育者として子どもたちの前で、子どもたちの様子を見たり、あるいは子どもたちに指示を出したりしながら、楽しく堂々とピアノ演奏ができるということであると思う。したがって、保育者として、という視点を大事にして指導に当たっている。

ピアノ演奏をするとき、学生にとって一番困難なところは、高音部譜表を右手でピアノを弾き、同時に低音部譜表を左手でピアノを弾くということである。さらに、様々な音楽情報を読み取り演奏に生かすということである。右手、左手の練習を十分にし

た上で、両手を合わせてピアノ演奏するということをしを繰り返し指導している学生も若干名いるが、こうした積み重ねの練習が大切であると思う。それと同時に、右手と左手のリズムが異なる時、音が何拍目で重なるのかを鉛筆などで自分が分かるように記入する指導もした。そうすることで、テンポはゆっくりであるが、次第に両手でピアノ演奏できる学生が増えてきた。学生一人一人の実態に即した練習量の確保と、段階的に丁寧な指導をしていくことが大切であると思う。学生を認め励まししながら、教育現場で生きて働く「ピアノ実技の力」を高めていきたい。

5 まとめ

ピアノ実技の力は、保育現場では必要不可欠である。このことは、今回の学生に対する実態調査・意識調査においても、多くの学生が「必要である」ことを認識している。

今回の実践研究では、「ピアノ実技」をするためには特に、読譜力を高める指導に焦点化し、学生の実態を踏まえながら明確な観点をもって、具体的に指導していくことの大切さを明らかにした。このことは、学生が主体的にピアノ実技の力を高めていくことに大きく起因している。教員は、学生の実態に応じて、段階的系統的な指導を意図的に仕組んでいく必要がある。

本学で「ピアノ実技」を学んだ学生が、教育現場で子どもたちとともに楽しく保育に関わってくれることを期待するとともに、今後も学生の実態分析をしたり学生の意見を指導に取り入れたりしながら実践研究をし、検証を累積していきたい。

引用文献

- 市橋佳明(2016), ピアノの弾き歌いにおける指導の実践研究, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部 教育実践研究第2巻(2017), P67~76.
- 厚生労働省(2008), 保育所保育指針解説書, フレーベル館, P96~104.
- 文部科学省(2008), 小学校学習指導要領第2章第6節音楽, P75~82.
- 文部科学省(2008), 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, P158~166.